
中世の南海トラフ巨大地震

(石橋克彦: 南海トラフ巨大地震—歴史・科学・社会、岩波書店、2014、61-80)
2014年11月7日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

中世の南海トラフ巨大地震について、過去の記録をもとに、その規模や被害状況、震源地等进行分析し、さらに東海地震との関連についても検証したものである。

「1498年明応東海地震」

明応7年8月25日(1498年9月11日)の辰刻(朝8時頃)巨大地震が東海地方を襲った。京都は50年来経験したことがないような強い地震動に見舞われ、少なくとも4ヶ月間、余震と思われる揺れを感じた。しかし被害は記録されていない。本震の京都の震度は4~5弱くらいと推定される。奈良は震度5弱程度だろうか。地震の日に伊勢・参河・駿河・伊豆の諸国に大浪が打ち寄せ、海辺から2~3kmまでの民屋がことごとく溺水し、数千人と牛馬無数が命を落とした。地殻変動は不明だが以上の津波・地震動の状況から、この地震が少なくとも熊野灘~遠洲灘を震源域とする東海地震であったことは確かである。理科年表は「震害はそれほどでもない」と記しているが、京都や奈良の揺れの強さと有感地震の多さ、及び熊野の強震動から東海地方の地震動も激しくて震害も大きかったと推測される。

「明応東海地震に対応する南海地震」

明応東海地震に対応する南海地震があったことは、ほぼ確実と考えられている。しかし、揺れと津波の確かな文献史料がなく、年月日が特定されていない。現段階では、明応南海地震の候補は、可能性が低いかもしれないものを含めて4つあると考えられている。日付の早い順に、明応7年6月11日、同年8月25日(東海地震と同時)同年10月18日、永正9年6月9日である。

「1361年康安南海地震」

鎌倉時代末の康安元年6月24日(1361年7月26日)の卯刻に近い寅刻(午前4~5時頃)、大地震が京都とその周辺を襲った。地震動と津波の状況から本地震が紀伊水道沖~四国沖を震源域とする南海巨大地震だったことは確実と考えられる。総覧はM8.1/4~8.5としているが状況から判断すると南海地震としては大きな部類だったと推定される。

「1361年康安東海地震」

現在の通説では、前項の南海地震とペアをなす東海地震は特定されていない。総覧も理科年表も、前項の南海地震の直前に正平16年6月22日の畿内諸国の地震を掲げ、同月16日ないし18日から京都付近に地震が多かったことを述べて、24日の地震の「前震か?」と記している。もしそうならば、南海地震に顕著な前震が伴った唯一の例になる。しかし実は、この22日の地震こそが東海地震だと考えられている。地震史料を素直に読めば、16ないし18日から前震的・群発的な地震が続いて24日に南海地震が起こったというよりかは、22日早朝に熊野灘以東を震源域とする東海地震が発生し、直後からその余震が頻発するなかで、24日の南海地震が発生したと考えるほうが自然である。すなわち、康安元年6月22日(1361年7月24日)の6時頃に東海地震が発生した。京都では震度4~5弱くらいだろうか、法隆寺付近の震度は5の中ほど、熊野の震度は6だったと推定される。